

あとがき

「日本の常識は、世界の非常識」という表現がある。この本を書く間に、この表現をしばしば思い出した。実際、世界、とりわけ欧州で普通に行われていることが、日本ではやられていないことが実に多いからだ。

教育の現場では、この表現がよくあてはまる。例えば、学校で暴力行為があれば、市中と同じように警察を呼ぶのが、欧州の常識らしい。欧州では校則などはないのが多数派らしいが、日本では40～50個もの内容を決め、子どもに強制している。校則で下着の色や拳手の仕方まで決めるのは、いくら何でもやりすぎだ。日本人の極端に走り、なんでも徹底しないと気が済まない性格からこうなるのだろうが、もっと万事気楽にゆったり構えて暮らしたいものだ。

気楽にゆったりで済まないのは、問題解決の動きだ。校則見直しや学級定員の少数化要求の動きが市民レベルから出ているが、あまりにも対応が遅い。3周遅れの日本なのに、保護者はじめ関係者の問題解決に向けた動きがやっと始まった。国会で教育問題全般が取り上げられることは少ないし、野党も真剣に実態を調べることも少ない。

日本では、解決すべき問題は数多いが、私がなかでもすぐ解決に向け、動いてほしいのは2点だ。

第1点は、格差是正、なかでも正社員と非正規社員（2100万人もいる）との格差だ。女性非正規社員は、全女性社員の55%もいるそうだが、非正規社員は給与が正規社員の半分、これでは子どもを抱えた社員は生活だけで精一杯、子どもの大学進学など厳しい。非正規社員は、大企業なら全社員の1割以下に抑える規制をすぐにもやるべきだ。

第2点は、引きこもりの解消だ。第3章で論じたように、引きこもりの背景は、学校が大きく関係しているが、100万人以上の人々が自宅から自由に出られず、引きこもるという事象を国全体が真剣に向き合わない現実が信じられない。

これまで読んだ本の中で、ベスト3に入るのに本論で紹介できなかった本がある。それはフィンランド留学体験の記録『青い光が見えたから—16歳のフィンランド留学記』である。著者・高橋絵里香は、北海道で小学校5年時、フィンランドのトーヤ・ベンソンのムーミン童話を読んで感激し、親にフィンランド留学を願い出る。親は中学では早いと、高校留学を許し、彼女は高校3年間留学する。

高橋が体験した学校生活は、日本のそれとはすべてが真逆であった。格式ばらない入学式、校則なし、フランクな教師・生徒関係、それですべてがうまく回っていたという。最も違っていたのは、教師が生徒を殴ったりすれば、校長に訴えず警察が来ることであったという。このことを聞いて、著者は自らの中学校の体験を思い出し（他の生徒が殴られていた）、彼我の余りの差に衝撃を受け、北海道の記憶を思い出し涙ぐむ場面が出てくる。高橋は、本当の教育の良さを知り、フィンランドの大学に進学し、帰国後は日本の国立大学で教鞭をとっている。

日本の教育は、管理・統制が行き過ぎているので、大昔から信頼していなかった。だから、最初の海外駐在を言われた時、中1、中3の娘2人は日本残留や海外日本人学校を選ばず、現地英系学校へ入れた。そこで初めて高校でディベートの授業があることを知り、びっ

くりした。

日本では、ディベート・討論の授業はほとんど行われていない。ディベートはしっかり考えなければならないし、教師の手間がかかるから、やられていないが、思考力・判断力を育てるうえで重要だ。それに表現力も必要で、社会へ出て大事な能力である。日本人は、国際会議などできちんと発言できないと言われるから、小学校からディベートの訓練をすべきだろう。

いずれにしろ、日本の教育は欧米とはかなり異質な部分が多い。教育関係者を含め、多くの日本人が海外教育事情に関心を持ち、文献を読み、日本の教育を再建する必要があることを認識し、改革に向け動いて欲しい。私の切なる願いである。

私は、特別の見識や文章力があるわけでもない。ただ、ここ30年来の読書歴で得た知見から、日本の問題点を数多く知り、それを変えないことには日本の再生・復活はありえないと確信し、この本を書こうと考えた。

本を書けたのは、参考文献でも紹介した多くの識者・専門家の著作で優れた見方に触れることができたからだ。また、新聞やネットサイトの論文なども大いに参考になった。関係者の方々に深く感謝したい。

また、この出版の企画を取り上げてくださったあけび書房の久保則之氏にも御礼を言いたい。久保氏の同意とご尽力がなければ、本書が世に出ることはなかったからだ。

本書が少しでも社会変革のお役にたてれば、望外の喜びである。

2020年11月20日

菱木勤治